
幸せの色

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

幸せの色

【Nコード】

N3444B

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ただひたすら青い絵を描き続ける達也。それを見た諒子は黄色い絵を描く。それぞれこの色こそが幸せの色だと信じて。ただひたすら絵を描いていく二人はどんな幸せの色を見つけていくのか。高校生の部活の話です。幸せをイメージする色は人様々ですね。

第一章

幸せの色

「青い絵ってやっぱりいいよね」

この高校の美術部の一年中野達也は今日も部室で青い絵を描いていた。

「空の青も。海の青もさ」

その絵を描きながらにこやかに笑っていた。

「描いていて楽しいよ。やっぱり青がいいね」

「本当に青が好きなのね」

それを聞いた一人の少女が彼に声をかけてきた。彼と同じ美術部の一年井出諒子だ。

「いつも描いていて」

「そうだね、青だったら何でもいいんだ」

達也はそれに応えて言う。

「青い絵を描けるんだったら」

「どうしてそんなに青が好きなの？」

諒子は問う。

「よかつたら教えて」

「それは幸せの色だからだよ」

達也の答えはこうであった。

「幸せの色？」

「うん」

にこりと笑って頷く。

「ほら、青い鳥がそうじゃない」

「ええ」

メーテルリンクの童話である。あれの青い鳥のことであるのは諒子も知っていた。

「あの鳥は幸せの色だったじゃないか。青は幸せの色なんだよ」

「そうなの」

「僕にとつてはね。だから青い色を描くんだよ」
それが達也の主張であった。

「今もこれからもね」

「ふうん」

諒子はそれを聞いていた。聞いているうちにふと思った。

「それじゃあ」

「何だい？」

顔は絵に向けている。声だけで諒子に伝えた。

「私が幸せの色を描いてもいいのよね」

「僕は別に止めないよ」

それに対する達也の返事は素っ気なかった。

「だって僕のこれは僕の幸せの色だから。他の誰が描こうと構わな
いさ」

「そうなの。じゃあ描くわ」

「どうぞ。それで君も青い絵を描くの？」

「ううん」

だがそれには首を横に振った。達也は見えていなかったがその顔は
にこりと笑ったものであった。

「私の色は違うから」

諒子は言った。

「別の色を使うわ。貴方とは違う色をね」

「じゃあそうしたらいいよ。けれど何の色なの？」

「それは後でわかるわ」

「後で」

「だから待ってえ。すぐに描くから」

「うん」

達也は相変わらず青い絵を描き続けていた。諒子はその横で絵の
具と筆を手に取った。そして彼女もキャンバスに絵を描きはじめた
のであった。それは同じ幸せをイメージして描いていても達也のそ

れとは全く違う絵になろうとしていたのであった。

数日後達也の絵は出来上がった。それは海の絵だった。

「また青い海ね」

諒子はその海の絵を見てまずはこう言った。

「綺麗な青い海」

「夏休みに見た海なんだ」

達也は自分の絵を見て目を細めていた。細めながら応えていた。

「それを描いたんだけれどどうか」

「中々いいと思うわ」

見れば諒子も目を細めていた。彼女もその絵から幸せを感じているようであった。

「広くてそれでいて落ち着いていて。いい海ね」

「だろう？だから絵にしてみたんだ」

達也は言う。

「上手くいったみたいだね」

「そうね。だから私も負けてられないわ」

そしてその絵は彼女の絵心も刺激したのであった。

「見ている。貴方のそれと同じ位、いえもっと凄い幸せを描くから」

「君の幸せはそれなんだね」

達也は自分の横にある諒子のキャンバスを見て言った。

「その色が」

「ええ」

諒子はそれに応える。彼女の絵は黄色い小鳥の絵であった。

「これが私の幸せの色よ。黄色がね」

「黄色かあ」

「幸せの黄色いリボンっていうじゃない。だからよ」

そしてその小鳥はまるで達也の好きな青い鳥に対抗しているかのようであった。優しく、あどけない顔をしていた。

第二章

「私は黄色を描くわ」

「そうなんだ」

「貴方が青で幸せを描くのなら私は黄色で。それでいいわね」

「うん、じゃあ僕も青で描いていくよ」

達也もその言葉に刺激を受けた。

「競争ってやつかな」

「そうね。言われてみればそうかも」

諒子はその競争という言葉に微笑んだ。

「じゃあどちらが幸せを描くか」

「勝負だね」

笑みを浮かべ合う。それからまた描きはじめる。達也は青い絵を、諒子は黄色い絵を。二人はそれぞれの絵を描いていつていた。

もうどれだけの絵を描いただろうか。達也も絵も諒子の絵も結構な数になっていた。だが二人はそれでも毎日部室で黙々と描き続けていた。

「二人共いつも頑張ってるわね」

顧問の綾坂先生がそんな二人に声をかける。黒のロングヘアの大人の女性であった。

「いいことよ、それは」

「有り難うございます」

二人は顔を向けてそれに応える。相変わらず並んでキャンバスに向かっている。

「けれど同じ系列の色なのね」

これはもうすぐにわかることだった。

「中野君は青で井出さんは黄色で」

「ええ」

「中野君は前聞いたけれど」

それが幸せの色だから使っている。それは以前本人から聞いていたので知っていた。だからそれはよかった。

「けれど井出さんは」

「私も同じです」

諒子はにこりと笑って述べた。

「黄色が幸せの色だから」

「やっぱり」

それを聞いて実に頷くものがあつた。

「それでなのね」

「はい。幸せっていつたら黄色ですから」

「違うね、青だよ」

達也はそれを聞いて諒子をからかうように言った。

「幸せの青い鳥の」

「じゃあ私は幸せの黄色いリボンよ」

諒子も負けじと言い返す。

「黄色が幸せの色なんだから」

「だから青なんだって」

達也も負けてはいない。

「そうですね、先生」

「ええ、確かにね」

先生はまずは達也の言葉に頷いてみせた。

「中野君の言う通りよ。青い色は幸せの色」

「ほらね」

「けれど黄色も幸せの色よ」

「えっ」

「そら見なさい」

達也は勝ち誇った様子がすぐに驚きになり諒子は齒噛みが瞬く間に勝利の笑みに変わる。

「どちらも幸せの色なのよ」

「どちらもですか？」

「そうよ」

先生は今度は二人に対して言った。

「そんな、幸せの色って一つじゃないんですか」

「だって。君達だって今それぞれ幸せの色って書いてるでしょ」

二人の絵に目をやって述べる。

「そういうことなのよ」

「そういうことって」

「どういうことなのかしら」

「難しく考えることはないのよ。言ったままだから」

そう言っただけで包み込むような笑みを二人に向けてきた。それは彼等より多くのことを知っている年長者が教える笑みであった。

「青も黄色も幸せの色」

「はあ」

「そういうことなのよ」

「どちらも」

「そう、そして青や黄色の他にもね、幸せの色はあるのよ」

「そうなんですか」

二人はそれを聞いて首を傾げさせた。どうにも話がわからないのだ。

だが先生はそんな二人に対してまだ笑ったままだった。穏やかな笑みを向け続ける。

「考えてみるといいわ」

「けれど何が」

「考えてみるだけでなく探してみるのもいいわよ」

「探すのですか？」

「きつと側にあるわよ。すぐ側にね」

「うづん」

達也にも諒子にも先生の話の意味が全くわからなかった。そんなことが有り得るのかとさえ思えるのだ。達也にとっては青、諒子にとっては黄色が幸せの色、そう思っただけで描いてきたからだ。そ

れが変わるのか。とてもそうは思えない。先生の話はまさに狐に
ままれたような話であった。

「描くなどと言わないから」 10

先生はこう言い加えた。

「描きながら考えてみたら？」

「はあ」

「じゃあそうさせてもらいますね」

「できたら先生に見せて」

穏やかな笑みは変わらない。

「楽しみにしてるからね」

「わかりました」

二人は答えた。それからまた描いて描いて描いてであった。けれど達也の色は青いままで諒子の色は黄色いままだった。それが変わることはなかった。

二人にはどうしてもわからない。幸せの色は一つしかないと思えなかったのだ。達也も諒子も。どれだけ考えても悩んでも結論はそれである。それでも考え続けて描き続けているが。結論は変わりそうにもなかった。

「井出さん」

考えながら描き続ける中達也は諒子に声をかけた。学校の帰り道であった。

第三章

「わかった？」

「全然」

その日も描いていたがわからなかった。達也が描くのは青で諒子のは黄色、それ以外になかったのだ。二人はまだ先生の言葉の意味が全くわからないままなのであった。

「何が何だか」

「そうだよなあ」

達也は諒子の声を聞いてぼやいた。二人は夕暮れの道を並んで歩いていた。

「僕もだよ。何なんだか」

「中野君もわからないでしょ？」

「あかるわけないじゃないか」

達也は困った顔になっていた。

「わかってたらこんなに悩まないよ」

「そうよね」

「一体何があるんだよ、青以外に」

「黄色以外に。あるのかしら」

二人には本当に他には思い浮かばないのだ。幸せの色と言えば。

「青い鳥じゃないか」

「黄色いリボン」

「どちらも幸せの象徴である。」

「他に何かあるんだよ」

「ないんじゃないかしら」

悩んでも悩んでもわからない。達也はそ中で言った。

「ねえ」

「何？」

諒子はその達也に顔を向けた。その声に応えて。

「先生にはわかってるんだよね」

「わかってるから言ったんでしょね」

「だよねえ。先生にはわかかっていて僕達はわかっていないのか」

「けれど聞いても教えてくれないと思うわよ」

「絶対にね」

他の幸せの色はわからなくてもこれはわかった。あの様子とあえて言い出したことから先生が教えてくれないことはわかるのだ。肝心なことはわからなくてもこれはわかった。

「やっぱり考えるしかないのかなあ」

「困ったわね」

「うん」

二人は空を見上げて眉も口元も顰めさせていた。

「見つからないわ」

「僕もだよ」

「先生はああ言うけれど」

「青しかないよなあ」

「黄色しか」

それぞれ違う色だが二人にはそれしかなかった。お互いの違いは
この場合は全く考慮していなかったのである。あくまでそれぞれの
ことしか考えていなかったのだ。

「ないかもね」

「そうね」

諒子は達也の言葉に頷いた。

「なかったらどうする？」

達也は諒子に尋ねた。

「どうするって」

そう言われてもどうすればいいのか彼女にはわからなかった。

「どうしよっ」

「絵は描くよね」

「それはね」

それ自体は変わらなかった。

「けれど」

だが。それでも見つかりはしないのだ。それはどうしても見つかりはしないのではともさえ思われるものであった。今の二人にとっては。

「それでも描くしかないか」

達也は言った。

「青い絵をね」

「じゃあ私は黄色の絵を」

結局そうするしかないのがわかる。

「描いていくわ、とりあえず」

「そうするしかないしね」

「ええ。けれど本当にあるのかしら」

何かそれ自体がもうわからなくなってきた。

「他の幸せの色なんて」

「ないかも」

達也も不安になってきていた。

「少なくとも今は思いつかないよ」

「ええ」

その日もわかりはしなかった。その次の日も。二人はわからないまま絵を描き続けていた。そんなある日だった。部活で外に出て風景画を描くことになったのだ。

第四章

「ここですすね」

「ええ」

綾坂先生は部員達を前にしてにこりと笑った。そこは緑豊かな公園であつたのだ。周りにも緑の木々が立ち並んでいる。

「ここにあるのなら好きなのを描いていいわよ」

「好きなのをですか」

「どんなものでもいいわ」

先生はかなり大胆に作画の対象を決めていた。

「自分がこれだというものをね。描いていいわ」

「よしそれなら俺はあの女の子を描くぞ」

「私は噴水」

部員達はそれぞれ描く対象を決めていく。その中には当然ながら達也と諒子もいた。

「君達もね」

先生は二人に声をかけてきた。

「好きなのを描いていいわよ」

「わかりました」

二人はそれに頷く。その彼等に他の部員達が声をかけてきた。

「中野は空か？」

「それで井出さんは黄色い風船かしら」

「まあそんなところかな」

達也はからかいに応じず素直に返した。

「私も。それがあればかなあ」

諒子それは同じであつた。二人はからかわれているのはわかつていたがそれに適度に返せる程心に余裕があるわけではなかつたのだ。やはりずっと色のことで悩んでいるのだ。

「じゃあ今からね」

先生が開始の合図をした。

「わかりました」

生徒達は散つていく。その中には勿論達也も諒子もいた。

達也はやはり空を描いていた。諒子は黄色い服を着た子供を描いていた。皆の予想通りと言えは予想通りで青と黄色であった。二人はそれを描きはじめた。

けれど描いていてもどうにも集中できない。考えるのはやはり他の色のことだ。それが何なのかまだ見つからないしわかりもしない。二人はそれにもどかしくもあり苛立ちも覚えはじめていた。

達也も諒子も。それをどうにかしたくてもどうにも出来ない。それが余計に嫌だった。あれこれ考えているうちにも絵を描いていく。だが絵もどうにも進まない。二人共キャンバスには何も描いていないという状況であった。

「駄目だ駄目だ」

達也はたまりかねて言った。そして立ち上がる。

「こんなのじゃ描けやしない」

そのまま気分転換にその場を離れることにした。暫く歩いていると諒子に出会った。

「君もか」

「ええ」

諒子はこくりと頷く。彼女もどうにもならず気分転換に歩き回っていたのである。

「どうにも筆が進まなくて」

「僕もさ」

達也は答えた。

「どうしたものかな」

「困ったわよね」

「ああ」

達也は苦い顔をしていた。諒子もまた。

「青い色を描こうと思ってもね」

「こつちも。何か描けないわ」

「何かある筈なんだけれど」

「その何かがね」

二人にはわからないのである。

「どうしたものかしら」

「探すしかないよね」

「それで見つかってたら今こつちして悩んでなんかいないわよ」

諒子は実に率直に述べた。

「違つかしら」

「確かに」

達也もそれに頷く。二人は今緑の公園を並んで歩いていた。緑の並ぶ公園を。

美術部の仲間達があちこちで描いている。彼等の他にも街の人や小さい子供を連れた母親もいる。何処にでもある平和でのどかな公園であった。

二人の側にそんな母子が歩いてきた。若い母親が小さな子に何か教えていた。

「この葉っぱがね」

「うん」

見れば男の子であった。その男の子が母親が手に持っている緑色の葉っぱをじっと見ていた。

「皆を守ってくれているのよ」

「皆を？」

「そうよ」

母親は男の子に教えている。二人はそれをぼんやりと眺めていた。空気を奇麗にしてくれてお水も持っていてくれてね

「葉っぱって凄いなだね」

「ええ、凄いのよ」

母親は優しい顔で我が子に語る。その手の中の葉っぱが眩しい位に鮮やかな緑を見せている。

幸せの色

「こんな小さな葉っぱでもね」

「僕を幸せにしてくれるのかな」

「幸せ……」

二人はその言葉に耳を睜った。

第五章

「そうよ」

母親は二人のそんな様子には気付いていない。だがこう言った。自分の子供に。

「しんちゃんだけでなくて皆もね。幸せにしてくれるのよ」

「そうなんだ、凄いなだね」

「わかったかしら。葉っぱの凄さが」

「うん、その葉っぱは貰っていい？」

男の子は目を輝かせて母親に尋ねてきた。

「ええ、いいわよ」

その優しい笑みのまま答えを返す。

「緑はいい色だから」

「本当だね、何か」

男の子は母親からその葉っぱを受け取って言った。

「気持ちが穏やかになるみたい」

「気持ちがいい？」

二人はその言葉に耳を傾けさせた。

「お母さん、有り難う」

「もつと欲しい？」

有り難うと言う自分の子にさらに言っていた。

「もつともつと欲しい？」

「くれるの？」

「ええ。だからおうちに帰りましょう」

優しい声で我が子に語り掛けている。

「お庭にも緑が一杯あるからね」

「あつ、そうか」

男の子はそれを言われて気付く。

「そうだね。草やお花が」

「だから帰りましょう」

母親はまた言った。

「それでそれをお母さんと一緒にね」

「見せてお母さん」

「ええ、今からね」

「お母さん、緑もつと見せてよ」

男の子の声が公園に響いている。その母子は笑顔で公園を後にする。その手に緑の葉っぱを見て。達也と諒子はそんな二人をずっと見ていた。

母子が見えなくなってから。やっと達也が口を開いた。

「あのさ」

諒子に声をかける。

「さっきの話だけれど」

「幸せの色よね」

諒子はそれに応えた。

「今気付いたんだけれどね」

「何に？」

「あれだよ、さっきの男の子緑色の葉っぱ持って楽しそうにしてたじゃない」

「ええ」

「それでさ、思ったんだけど」

彼は少し戸惑いながら諒子に語っていた。

「何て言ったらいいかな。ほら、僕は青じゃない」

「それで私は黄色」

「合わせたら……緑になるじゃない」

達也はそのことに気付いたのだ。

「青と黄色を合わせたら」

「二人の幸せの色を合わせたら」

諒子も気付いた。

「緑になるよね」

「そうよね。だから幸せの色って」

「緑もそうなんだよ」

達也も諒子もやっとそのことに気付いた。

「青や黄色だじゃなかったんだよ、緑だってそうだったんだよ」

「そうよね、私達の色を合わせたら」

「うん」

達也は笑顔で頷いた。

「また幸せの色になるんだ。だから」

「それも描けばいいのよ」

「そうだよ、本当に一つじゃなかったから」

笑顔が明るさを増していく。

「描こう、すぐに」

「そうね、緑を」

諒子もまた。明るい笑顔だった。達也のそれと同じく明るさを増していく。

「描きましょう」

「うん！」

二人は頷き合う。そしてそれぞれのキャンバスへ戻った。

二人は今それまでとは全く別の、新たな幸せの色を描こうとしていた。キャンバスにそれまでとは違う色が描かれていく。それが二人の答えであった。見つけ出した答えであった。

「あっ」

「色、変えたのか」

「うん、ちよつとね」

「これが私達の答えだから」

部の仲間達に笑顔でそう返す。

「答え！？」

「そうだよ」

「それがね」

「何かよくわからないな」

幸せの色

事情を知らない彼等は首を傾げさせた。だが先生は違っていた。そんな二人の絵を見てにこやかに笑っているのであった。別の幸せの色を見て。

幸せの色 完

2006・9・18

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3444b/>

幸せの色

2008年11月7日07時46分発行